

共に生きて

紙面についてのご意見、感想をお寄せください。メール、ファクスで受け付けます。郵送の場合は〒810-8721(住所不要)、西日本新聞生活特報部へ。

生活特報部 FAX 092 (711) 9056 メール seikatsu@nishinippon-r

小さな命のキセキ

19

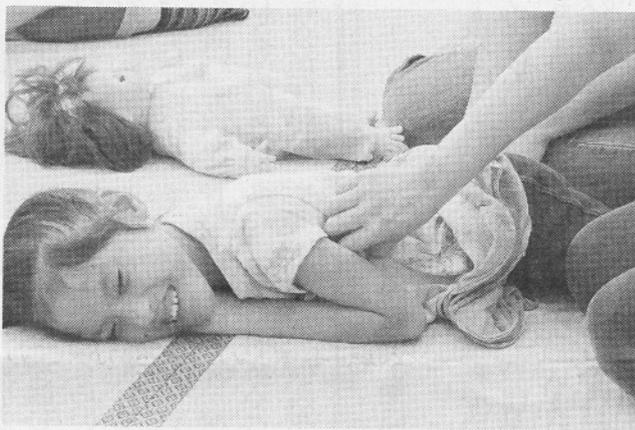
登山 万佐子

低出生体重児(未熟児)の家族会「Nつ子クラブ カンガルーの親子」の第1回定例会に参加してくれた男子中学生は今春、大学を卒業して社会人になりました。お母さんが泣きながら話していた新生児集中治療室(NICU)に入院中の赤ちゃんは小学生になり、妹も生まれました。

医学は進歩し、超低出生体重児の生存率は上がっています。でも、亡くなってしまふ子、障害や病気が残るお子さんがいることも事実です。家族会にも、わが子を亡くした方がたくさんいます。多胎児の1人が死産になったり、NICUに入院中や退院後に亡くなったたりしています。2歳

を前に亡くなった女の子の葬儀は今も忘れられません。しぐさが愛らしい子で、亡くなる前日にお見舞いに行ったばかりでした。NICUには、早産児や低出生体重児だけでなく、先天的な病気があったり、出産後に異変が起きたりした赤ちゃんも入院しています。生まれてすぐに手術が必要な子、NICUに1〜2年も入院する子、人工呼吸器をつけるなどの医療ケアが必要な状態での退院する子もいます。家族会発足時は、会場に足を運ぶことができる家族し

お母さんに触れてもらい、喜ぶ綾美さん



母と子にタッチケア

か会う機会がなかったの、在宅医療で退院していく子どもとその家族の現状を知りませんでした。長女綾美(8)が発達支援センターに通い始めて、在宅看護をしているご家族に会うようになりまし

24時間、目が離せず、外出したくてもできない毎日。綾美が午後半年でNICUを退院したときに私が感じた不安に加え、命に直結する医療ケアの緊張も続きます。医療ケアが必要なくても、NICU退院直後は外出がままならない人がたくさんいます。家族会に参加したくても足を運べないお母さんたちのためにできることはないだろうか。こう考えるようになりました。足を運べないなら、私から行こう。長年、新生児医療に携わり、家族会発足時から支えてくださっている聖マリア病院(福岡県久留米市)の橋本武夫元副院長が会長を務める「日本タッチケア協会」に

加わり、勉強を始めました。お母さんが赤ちゃんの目を見つめ、語りかけながら、素肌に触れてマッサージするなど、ケアしてあげるのがタッチケアです。娘が保育器の中にいるときから実践し、私自身も助けられました。今も娘はマッサージが大好き。タッチケアは子どもが何歳になってもできるのです。

人工呼吸器をつけ、気持ちを言葉にできない子も、心拍や脈拍にちゃんと反応が現れます。お母さんのマッサージはとても気持ちが良いのです。その後、私がお母さんにマッサージしながらお話をうかがいます。時には、お母さんのためだけの日になることもあります。母も子もほっとできること。私の願いです。

(「Nつ子クラブ カンガルーの親子」代表、福岡県筑紫野市)